

総合科学研究所だより

Research Institute of Integrated Sciences and Humanities

巻頭言

総合科学研究所長 渋谷 寿
SHIBUYA Hisashi

数値化できない能力

最近、非認知能力という言葉をよく耳にします。認知能力という、学力テストなどの数値で示すことができる能力に対して、数値化できない、人生を豊かに生きていく上で必要な能力などを表す意味で、特に教育の分野で使われるようになってきました。教育学者である無藤隆氏は、非認知能力とは、「学びに向かう力や姿勢」とも表せるとし、「目標や意欲、興味・関心をもち、粘り強く、仲間と協働して取り組む力や姿勢が中心になると考えるべき」と述べています。また、中山芳一氏は、「今後の教育には認知能力だけではなく非認知能力を育成することが大切であり、非認知能力は大人にも必要な能力だ」と述べています。更に、文部科学省が平成29年に告示した学習指導要領において「生きる力」として位置付けた「知識及び技能」は認知能力、「思考力・判断力・表現力等」は認知能力と非認知能力、「学びに向かう力・人間性」は非認知能力に位置付けられることを、それらの関係を示す図の中で解説していま

す。また、OECD（経済協力開発機構）が提唱している社会的情動スキルにおける1. 目標を達成するための力、2. 他者と協働するための力、3. 情動を制御するための力、も非認知能力の一つとして説明されています。

これらの新しい考え方の背景には、これからのプーカ時代（先行きが不透明で、予測困難な時代を意味する）において、人間の仕事の一部を担うであろうAIなどと共存しながら、人間がより良く生きていくためには、認知能力と新たな視点としての非認知能力を共に発展させることが不可欠になるという考え方があると言えるでしょう。

総合科学研究所の機関研究の一つである「大学における効果的な授業法の研究」においてもアクティブラーニング、ディープラーニングなど時代に即応した様々な授業法が研究されてきましたが、認知を超える学ぶ力であるメタ認知という概念も検討されていました。ここでは詳しく述べませんが、認知と対置する非認知と、認知を超えるメタ認知も、未来における人間の学び方・生き方の可能性を広げる、数値では示せない重要な視点と言えるでしょう。

総合科学研究所の機関研究における人を対象とした研究にも、数値化して分析することが難しい内容が含まれています。これらの研究が新しい視点を取り入れることにより、時代の価値基準に即応するように進展していくことが期待されます。本便りに報告させていただき、総合科学研究所の活動をご理解いただき、様々な分野でご協力していただきますようお願いいたします。

令和3年度
「開かれた地域貢献事業」
報告

瑞穂区役所 育休復帰応援講座を終えて

名古屋市瑞穂区役所民生子ども課 古田和彦

平成30年から瑞穂区役所と名古屋女子大学が連携して、育児休業復帰後の働く子育て世帯を応援するため、育休中の方を対象に、大学にて作成いただいた時短レシピを託児付きで実際に調理する講座を実施してまいりました。

しかしコロナ禍の状況では、調理実習という内容であるため開催が難しく、最終的にZoomを使用したオンライン開催で、自宅にて一緒にお料理していただく方法で令和4年3月10日（木）に実施しました。

参加いただいた方々からは、「分かりやすい講座でとても楽しかった」との声もいただき好評でした。今回初めてのZoom配信の試みでしたが、託児を利用していただき、他のお母さんと交流しながらのクッキングという、これまでの大きな利点が生かせず、配信する側も参加者の様子が分かりにくいことが、課題として残りました。

コロナ禍の状況ではありますが、今後とも、連携を深め瑞穂区の子育てを応援するような企画を実施していきたいと考えております。



「時短レシピでクッキング！」Zoom配信の様子

令和3年度
「開かれた地域貢献事業」
報告

瑞穂児童館 共催事業の積み重ねの中で

名古屋市瑞穂児童館館長 江口裕子

新型コロナウイルス感染症の収束がみえない中、社会も徐々に「アフターコロナ」から「ウィズコロナ」へと変わりつつあった令和3年度でした。その中で様々なご支援を受けながら、子ども達の健やかな育ちを願う多様な企画を実施することができました。振り返りますと、10月の「身の回りの菌とキレイを見てみよう」という科学の興味を身近から引き出す企画からスタートしました。中々触れることのできない顕微鏡の操作と微生物の存在に、子ども達の学びも大きかったようです。またコロナ禍にあって、食育活動も十分に行えませんでした。大学の衛生的な整った環境の中で、「よく噛むおやつ作り」や「楽しいクッキーづくり」などにも取り組むことができ、食や咀嚼の大切さと作る楽しさをあじわうことができました。

一方、近年IT化が進み、特に低学年の子ども達のタブレットへの関心と必要性も高まり、「タブレットで簡単プログラミング」には、多くの希望者がありました。企画全てが予約制で、まだまだ大勢が参加する事は難しい現状も続いており、以前から好評の「子育て

支援」や「健全育成」の取り組みも、例年同様工夫を凝らした内容で、キャンセル待ちになるほどでした。各アンケートや写真の様子などを通して、参加者の達成感や満足感、楽しかった様子などに加え、もっとやりたい！の意欲が伝わってきました。また多岐にわたる企画の中で、児童館単独では実施困難な内容も共催して頂くことで実現でき、幅も広がっていることを実感しています。それに加えて、令和3年度は個人情報や人権にも配慮したガイドラインも示して頂き、利用者もより安心して参加することができたと思います。

ここ数年の社会不安や閉塞感漂う中、他機関や地域との連携も希薄になる状況が続いています。その中においても変わらぬ協力とご支援を頂き、感謝しております。今後も子ども達の記憶と心に残る楽しい取り組みを心掛けていきます。そして、これまで積み重ねてきた共催事業を大切に次年度につなげ、これからもより豊かに続いていくことを願っております。



よく噛むおやつ作り



プログラミングを体験しよう！



動くおもちゃづくり



クリスマスイベント

機関研究

「幼児教育で育みたい資質・能力に関する研究」

幼児保育研究会

今年度は、昨年度より着目している「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を土台に、より本質的な幼児教育の姿を生活発表会に集結させることを目指して、様々な研究課題を設定しています。また、幼小の連携の視点である「かけはしプロジェクト」の考えを基に、非認知能力の育成を捉え歩み始めました。昨年度同様、保育形態のプロジェクト化を継続し、さらに今年度は、各担任が関心をもっていることをそれぞれのプロジェクトとして取り組むことにしました。取り組みへの視点としては、種団子作りや遊びにつな

がる植物の栽培法や、生命プロジェクトにおける蚕や蝶の羽化から考える生き物と子どもとの関わりなどが挙げられています。さらに、園内での稲栽培から、子どもの食育へのつながりも目指しています。今後は、それぞれのプロジェクトの意義を明確にするとともに、それらが、互いにどのように関連を持ちながら子どもの育ちへとつなげていくことができるかに注目して取り組んでいきたいと考えています。

(文責：森岡とき子)

機関研究

「大学における効果的な授業法の研究9」

竹内正裕(代)・市村由貴・河合玲子・佐々木真吾・佐々木基裕・杉原央樹・内藤紘一・橋本侑美・羽澄直子・服部幹雄・三宅元子・吉川直志

令和3年度から令和5年度の本機関研究は、「本学の教育に適した効果的なインストラクショナルデザイン」に関する研究をしています。「大学における効果的な授業法の研究8」で行った本学における効果的なアクティブラーニング(AL)の開発も継承しつつ、「教育活動の効果・効率・魅力を高めるための手法を集大成したモデルや研究分野、またはそれらを応用して学修支援環境を実現するプロセスのこと」を示すインストラクショナルデザインの開発を目標

とします。昨年度に引き続き、教育におけるICT化にも焦点をあて効果的なインストラクショナルデザイン設計のために、各研究員が大学で担当する授業を紹介し合い意見交換をしていきます。また、インストラクショナルデザインの授業設計に関する文献輪読も進めます。学会や研修会にも積極的に参加して情報を収集していく予定です。

(文責：竹内正裕)

機関研究

「創立者越原春子および女子教育に関する研究」

遠山佳治(代)・河合玲子・三宅元子・吉川直志・吉田文

本研究は平成17年度から始まった機関研究で、令和4～6年度の3年間は第8期に当たります。最近では、大正から戦前期(平成25～27年度の第5期)、戦前から戦後へ(平成28～30年度の第6期)、戦後昭和期(令和元～3年度の第7期)というように、女子教育と本学の流れを時代順に社会背景とともに検討しました。その意味で、第8期は、10年ぶりに新しい視点でのテーマ設定となり、その初年度に当たります。まだ開始したばかりで、研究計画を立てている段階のため、今回は研究の方向性のみ記していきます。

本学の歴史を語る文献として、『越原春子伝 もえのぼる』(平成7年初版)、『越原学園百年』(平成27年)がありますが、大学・短

大の各学部学科等の教育内容の歴史・変遷が記されているものは『学園七十年史 春嵐』(昭和60年)です。すでに発行より約40年経とうとしており、本学も大きく変化しています。そこで、『春嵐』の補遺を作成するための資料集めが必要ではないかと感じています。とくに『学報』等資料の見直しを進め、『春嵐』の「年表」の継続ができれば望ましいと考えています。このように、少しでも、第8期の研究活動が、そのことに役立つことを想定して進んでいきたいと思っております。

(文責：遠山佳治)

機関研究

「食と健康に関する研究」

近藤浩代(代)・石田和人・小椋郁夫・駒田格知・近藤志保・高橋哲也・幼児保育研究会

本研究会は、昨年度食育に関連した幼～小学生を対象とした「読み本」を全国レベルで収集しました。それらを内容別、分野別、目的別に分け、さらに難易度、用語の使い方、問題解決法、キーワード別等さまざまな視点から分類を行い、現代の食育の指向する方向を解析する予定です。この分類と解析から得られたニーズから食育媒体を作成する計画です。

以前に作成した『「かむ」ってなあ～んだ』の媒体を教育現場ではどのように利用されているか、また改善点はどのようなか等様々な方向から検討して、当該冊子の内容をさらに発展させた活動から食育の指導書の作成を進めます。

今回は、「食と健康」シリーズ本の位置付けで「口腔・歯」の内容を子どもたちが理解できるよう冊子を作成しました。今年度はその内容を発展させたシリーズNo.2以降の例として、ヒトの口腔・歯の成り立ちや働き、発生(でき方)を基本としてまとめ、加えて消化器系全体の視点で口腔-胃腸-腸管等の腔所に注目し、その発生、形態、機能、感染等、総合的に整理を行います。

また、昨年度行った附属幼稚園のアンケート結果の解析と考察を行い、フィードバックを行う予定です。さらに、シンポジウムの企画等を視野に入れて活動を行う計画です。

(文責：近藤浩代)

プロジェクト研究

「学生による食育実践活動が対象者と学生にもたらす教育効果の検証」

山中なつみ(代)・佐喜真未帆・伊藤美穂子

本研究は、地域住民に対する学生主体の食育活動の実践が、対象者及び学生の両者にもたらす教育効果を明らかにすることを目的に実施しています。指導者がティーチング方式で実施するのではなく、対象者(地域住民)が身近に感じ、時には相手に示唆を与えることが出来る立場にあって、支援側(学生)と共同して食育活動を実践することは、対象者の実践的で確実な食行動の変容につながるのか否か、を検証します。さらに、学生が学外での食育活動を自らマネジメントすることにより、授業で修得した知識とスキルの統合

に繋げることができたのか、社会貢献への理解、意欲を高めることができたのか、についても検証していきます。今年度の対象者は瑞穂区在住の高齢者とし、「フレイルを知って介護予防!」をテーマとした食育講座の開催を9月と3月の2回、計画しました。フレイルに関するミニ講座及びフレイル予防に効果的な料理の普及として調理実習を実施します。

(文責：山中なつみ)

令和4年度地域貢献事業計画

令和4年度も瑞穂児童館、瑞穂区役所と各々連携した地域貢献事業を計画しています。瑞穂児童館との共催事業は、今年も参加人数や時間を制限しながらの実施となりますが、音楽あそびやおもちづくり等を楽しむ9講座とクリスマスイベント3講座を、9月から3月に開催予定です。継続的に実施している講座においてもこれまでの経験を活かし、安全でより楽しい講座になるよう児童館と協議しながら運営してまいります。瑞穂区役所との共催事業である「育休復帰応援講座」は今年で4回目となり、新しい取り組

みとしてレシピコンテストを実施します。「子どもと朝ごはん 瑞穂区ナンバー1決定戦!」と題し、瑞穂区在住の子育て世帯と本学学生を対象に食パンを使った朝食レシピを募集し、最終審査会を本学で9月に開催予定です。入賞作品を「子育て応援瑞穂区簡単朝食レシピ」として公開し、区民の方に役立てていただくことを目的としています。新たな企画にどうぞご期待ください。

(文責：山中なつみ)

大学講演会のお知らせ

演題

健康長寿を目指すためのフレイル予防

——医療科学部の目指す教育と超高齢社会での
理学療法士・作業療法士の果たす役割——

講師 竹田徳則先生 ● 本学医療科学部長・教授

日時 令和4年9月20日(火) 10:00~12:00

場所 学校法人越原学園 南4号館105講義室



略歴

竹田徳則(たけだ・とくのり)

日本福祉大学大学院 社会福祉学研究科 博士課程修了。2003~2004年度、茨城県立医療大学 保健医療学部 作業療法学科 助教授。2005~2020年度、星城大学 リハビリテーション学部 作業療法学専攻 教授。本学総合科学研究所教授を経て現職。

著書 ● 『ソーシャル・キャピタルと健康・福祉実証研究の手法から政策・実践への応用まで』(ミネルヴァ書房、2020)、『住民主体の楽しい通いの場づくり』(日本看護協会出版会、2019) 他

わが国は超高齢社会を迎え、理学療法士(PT)・作業療法士(OT)の需要が高まる中で、令和4年度に本学にリハビリテーション専門職を養成する新学部が誕生しました。そこで本年度は、医療科学部長の竹田徳則先生に、医療科学部の目指す教育内容とチーム医療の中でPT・OTの果たす役割について伺います。

さらに、竹田先生が取り組まれております健康寿命延伸と介護予防・認知症予防に関する研究成果などから、一人一人が健康長寿を目指すために必要なフレイル予防の取り組みをご紹介していただくことで、教職員の皆さんの健康づくりに参考になるお話を伺えるものと考えます。

※感染状況により、開催方法等を変更する可能性があります。

今年度(令和4年度)運営委員

委員長

森屋 裕治
MORIYA Yuji
(短期大学部)

河合 玲子
KAWAI Reiko
(短期大学部)

坂本 麗香
SAKAMOTO Reika
(家政学部)

福田 峰子
FUKUTA Mineko
(健康科学部)

堀部 要子
HORIBE Yoko
(文学部)

研究所メンバー

所長 渋谷 寿
SHIBUYA Hisashi

顧問 河村 瑞江
KAWAMURA Mizue

主任 山中 なつみ
YAMANAKA Natsumi

教授 越原 一郎
KOSHIHARA Ichiro

職員 牧野 弘実
MAKINO Hiromi

編集後記

総合科学研究所だより35号をお届けいたします。執筆いただきました関係者の皆様に感謝申し上げます。本号では令和3年度における地域貢献活動や機関研究に関する報告ならびに令和4年度の活動計画が掲載されています。新型コロナウイルス感染症に対する不安はなかなか解消されませんが、感染対策の要点も明らかになってきたことから、活発な活動の再開が期待されます。また、大学では医療科学部が開設され、新たな分野の教育・研究がスタートしました。本研究所の様々な活動においても、これまでにない視点や新しい連携が生まれ、より発展していくことを願います。今後とも皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

(文責：山中なつみ)